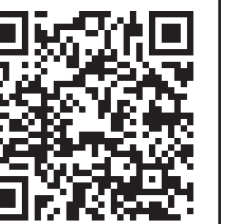


2024年産 あきさかり栽培のしおり

香川県農業協同組合中讃管農センター (綾坂用)
香川県中讃農業改良普及センター (監修)

生育特性に合わせた栽培管理を行い、高位安定化生産に取り組み、安全で安心な売れる米を作しましょう！

病害虫の発生状況については最新の香川県病害虫防除所のホームページをご覧ください。



○ 環境への配慮

- ① 稲わら、麦わら等は焼かずすき込み、堆きゆう肥等の施用により土づくりに努めましょう。
- ② 農薬散布の際は、周辺環境に被害を及ぼすことがないように飛散防止対策を講じましょう。

○ 品質・食味の向上

- ① 近年、平均気温が上昇していますので、播種、田植時期は生育管理の目安に準じて行いましょう。
- ② 地力に応じた施肥に努め、特に穂肥は草姿、葉色、品種特性に合わせた適期、適量の施肥を行いましょう。
- ③ 生育期間を通じて間断灌水を行い、適正な水管理に努めましょう。
- ④ 必須防除の徹底と病害虫の発生状況に応じて確認防除を実施しましょう。
- ⑤ 収穫前には異品種の混入を回避するため、コンバイン、乾燥機等の清掃を徹底しましょう。
- ⑥ 品質・食味を落とさないよう籾黄変率85%程度の時に収穫し、収穫後3時間以内に乾燥作業を行いましょう。

○ JA香川米への取り組み

消費者から信頼され、売れる米づくりのため、下記の要件を満たしたJA香川米の生産に取り組みましょう。

- ① 銘柄が確認された種子 (毎年、種子更新100%) により生産・出荷されたお米
- ② 栽培基準が守られている事が栽培履歴書により確認されたお米 (収穫15日前までに各支店、ふれあいセンターへ栽培履歴書を提出して下さい。)
- ③ JA香川県で農産物検査を受けたお米

「あきさかり」の特徴と栽培上の留意点

- ① 短稈で耐倒伏性は強い。
- ② 高温登熟条件で白未熟粒が発生しやすい。
- ③ 収量性は高く、極良食味。
- ④ いもち病、紋枯病にやや弱い。

※ 適正な肥培管理、防除が必要です!!

1. 生育・管理の目安

生育相	活着時期	茎が増える時期	茎の増加を抑える時期	穂ができる時期	穂が大きくなる時期	穂に実が入る時期															
作業の目安	作業基準	田植日	間断灌水開始 (田植後2週間)	中干し開始 (亀裂幅約1cmまで)	間断灌水開始 (出穂25日前)	穂肥施用 (出穂18日前)	出穂期	収穫期													
	管理の目安	6月5日	6月19日	7月3日	7月18日	7月23日	8月9日	9月14日~9月18日													
		6月10日	6月24日	7月5日	7月19日	7月27日	8月13日	9月17日~9月19日													
6月15日	6月29日	7月10日	7月22日	7月30日	8月16日	9月19日~9月23日															
水管理	深水 7cm	浅水 3cm	間断灌水	中干し	間断灌水	灌水	間断灌水														
栽培管理のポイント	土壌改良資材	箱処理剤施用	田植	初期除草剤散布	田(ガス抜き)	間断灌水開始	中期除草剤散布	中干し	病害虫防除	間断灌水開始	紋枯病防除	穂肥	出穂期防除	畦畔雑草刈取り	出穂前後水管理	カメムシ防除	間断灌水開始	落水	刈り	乾	籾摺・調製
	○ 基肥は施肥基準を参照し、過剰に施用しない。	○ 必須防除	○ 株間は20~22cmとし、植付深さは、2~3cmとする。	○ 十分に水深を確保する。散布後7日間は止水する。	○ ワキ現象が見られたら落水し、2~3日、軽く田干しする。	○ 分けつ促進のため、浅水とし、常に水を湛めない。	○ 使用基準を厳守する。	○ 基数が20%程度確保できれば中干しを開始する。	○ 地割れは1cm程度までとする。	○ 確認防除	○ 徐々に水の量を増やす。	○ 紋枯病にやや弱いため、発病を確認して防除する。	○ 生育、葉色に合った量を施用する。	○ 過剰生育のほ地では減肥する。	○ 斑点米カメムシの発生を抑えるため出穂10日前までに畦畔雑草を刈取る	○ 穂肥時期(出穂後14日間)は最も水分が必要な時期のため、灌水管理とする。	○ 必須防除(本田二回目)	○ 水入れの間隔を徐々に広げる。	○ 落水は収穫作業に支障のない時期まで遅らせる。	○ 籾の85~90%が黄変した時期が刈り取り適期。	○ 過乾燥を避け、玄米水分を14.5%以上にする。

2. 施肥基準

1) 基肥+穂肥の施肥基準

肥料名	全量	基肥	穂肥 (出穂18日前)	成分量 N-P-K
コシツータッチ	75	40	35	7.5-7.5-7.5

3) 土壌改良資材

資材名	全量(基肥)
ユーキ鉄ケイカル	100
苦土一番	40
けい酸加里	30~40

2) 基肥一発の施肥基準

肥料名	全量	基肥	成分量 N-P-K
あきさかり一発	40	40	7.2-4-5.6
Jコート48号	45	45	7.2-7.2-7.2

※ 手振りの場合は、基肥を1割増肥する。

本田施肥上の注意事項

- ① 基肥は地力、前作物の状態によって、穂肥は生育や気象状況によって、加減して過剰施肥を避ける。
 - ② 土づくりのため、荒起こし時にユーキ鉄ケイカルまたは苦土一番を施用する。
 - ③ 基肥一発タイプの肥料を使用する場合は原則、穂肥は施用しない。
 - ④ 苦土一番、けい酸加里の施用時期は、基肥、追肥 (出穂30~40日前) いずれの施用でも良い。
- ※ 水田では、肥料成分溶出後の被膜殻が浮上することがありますので、被膜殻を圃場外へ流出させないように注意して下さい。

3. 雑草防除基準

区分	使用時期 (推奨)	対象雑草名	除草剤名	使用基準 (登録内容)		注意事項	使用月日
				10a当り使用量	使用時期		
初期除草剤	移植後~9日	水田一年生雑草 マツバ、ホトケイライ、ウリカワ、ミズガヤツリ、ヒロミドロ、オモダカ	カチボシL ジャンボ	30g x 10個 (300g)	移植後~ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	① 散布後3~4日は水深3~5cmを保ち、1週間は落水やかけ流しをしない。	
	移植後~9日		ジェイソウルフロアブル	500ml	移植時~ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	② 薬や浮草が発生している水田では、拡散効果が低下し、薬害や効果不良の恐れがあるので使用しない。	
	移植時又は移植後~9日		ラオウ1キロ粒剤	1kg	移植時又は移植後~ノビエ2.5葉期 ただし、移植後30日まで	③ 移植時処理は、田植機に専用散布機を装着した場合に限る。④ 落水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。⑤ 薬が凝り固まった後は効果が劣るので、薬類の発生前~発生直前に散布する。	
中期除草剤	移植後7日~ノビエ3葉期まで	ノビエ キシュウズメノヒエ アザガヤ	クリンチャー1キロ粒剤	1kg	移植後7日~ノビエ4葉期 ただし、収穫30日前まで	① 初期除草剤散布後、ノビエ等が発生した場合に使用する。② 散布後3~4日は湛水状態を保ち、1週間は落水やかけ流しをしない。③ クリンチャーバスマE剤とあわせて3回以内の使用とする。	
	移植後20日~ノビエ3葉期まで	マツバ、ホトケイライ、ウリカワ、ミズガヤツリ、ウリカワ	セカンドショットSジャンボMX	25g x 20個 (500g)	移植後20日~ノビエ3葉期 ただし、収穫45日前まで	① 湛水状態で10a/20個を均一に投下し、散布後3~4日は湛水状態を保ち、1週間は落水やかけ流しをしない。② 薬や浮草等は拡散を妨げ、効果不足の原因となる。	
	移植後20日~ノビエ4葉期まで (落水後処理)	水田一年生雑草 マツバ、ホトケイライ、ウリカワ、ミズガヤツリ、オモダカ、キシュウズメノヒエ	クリンチャーバスマE液剤	1000ml	移植後15日~ノビエ5葉期 ただし、収穫50日前まで	① 水70~100ℓに溶かして使用する。② 落水してから散布し、その後3日間は落水しない。③ クリンチャー1キロ粒剤とあわせて3回以内の使用とする。④ バサグラン剤とあわせて2回以内の使用とする。	
草剤	移植後20日~30日 (落水後処理)	水田一年生雑草 (イネ科除く) マツバ、ホトケイライ、ウリカワ、ミズガヤツリ、オモダカ	バサグラン剤	3~4kg	移植後15~55日 ただし、収穫60日前まで	① 落水又はごく浅く湛水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。② 散布後少なくとも3日間 (浅水処理は5日間) はそのまゝの状態を保ち、入水、落水、かけ流しをしない。③ クリンチャーバスマE剤とあわせて2回以内の使用とする。	

4. 病害虫防除基準

1) 必須防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準 (登録内容)		回数	注意事項	使用月日	
			希釈倍数	使用時期			月	日
浸種前	いもち病、紋枯病、心枯病	テクリドCフロアブル	200倍 (水10ℓに20~10ml)	浸種前	1回	① 乾燥剤と同量~2倍量の薬液に24時間浸漬する。② 消毒後は種子を水洗いせずに浸漬する。③ 消毒後の薬液は排水などに流さない。		
		スミチオン乳剤	1000倍 (水10ℓに10ml)	播種前	1回			

育苗期の防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準 (登録内容)		回数	注意事項	使用月日	
			希釈倍数	使用時期			月	日
苗立	ピシウム菌、フザリウム菌	タチゲレウスM液剤	500~1000倍 (水10ℓに20~10ml)	播種時又は発芽後	1回	① 播種量の多い条件では苗が伸びすぎることがある。② 発芽後に使用する場合は1000倍希釈液を1箱当たり500ml灌水する。		
		ダコレート水和剤	400~600倍 (水10ℓに25~166g)	播種時~緑化期	2回以内	① 播種14日後までに使用する。② タチゲレウスM液剤、同防除剤を使用した場合は、必ず使用間隔を3日以上あける。		

育苗箱防除

防除時期	使用地域	対象病害虫名	農薬名	使用基準 (登録内容)		回数	注意事項	使用月日	
				1箱当り使用量	使用時期			月	日
田植え前	中山間~平地	いもち病、紋枯病、ウツギカビ、イネツトムシ	ビルダーフェルテラチエスGT液剤	50g	緑化期~移植当日	1回	① 老化病、軟弱徒長苗、葉葉がのびているときは薬害のおそれがあるので使用しない。② 葉葉に付着した薬液は、払い落とす。③ 移植後は直ちに灌水し株元の土が露出ないようにする。		
			スクワットレスモグリス箱剤	50g	播種時~移植当日	1回			

※ 「水稲育苗のしおり」を参考に施用する。

本田防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準 (登録内容)		回数	注意事項	品種及び使用月日		
			10a当り使用量	使用時期				月	日
防除一回	出穂20~15日前	いもち病、紋枯病、ウツギカビ、カメムシ類	ゴクワモンスター粒剤	3kg	収穫45日前まで	1回	① 3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。		
			ワイドバンチつぶ	250g	収穫35日前まで	1回			
防除二回	出穂3日前~直前	いもち病、紋枯病	ダブルカットバリダフロアブル	1000倍 60~200ℓ	穂肥期まで	2回以内	① 稲葉に均等に散布し隣接に飛散しないよう注意する。		
			スタークル粒剤	3kg	収穫7日前まで	3回以内	① 粒剤は3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。② 水溶剤は、稲葉に均等に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。③ コラップアップは、散布後2回以内の使用回数とする。④ 斑点米の発生を防ぐため、必須防除とする。		

※ 出穂前にダブルカットバリダフロアブルとスタークル粒剤水溶液の混用散布を行う。

2) 確認防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	使用基準		回数	注意事項	使用月日	
			10a当り使用量	使用時期				月
移植後	スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	スクミノン	1~4kg	収穫60日前まで	2回以内	① 移植後、スクミリンゴガイを確認したら直ちに散布する。② 水田周辺や湛水になる場所は被害が少ないので、所定の範囲内で多めに散布する。		
		ジャンボたにくん	1~2kg	は、あわせて2回以内の使用とする				
穂ばらみ期~穂肥期	紋枯病、いもち病	モンガリット粒剤	3~4kg	収穫30日前まで	2回以内	① 3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。		
		コブノメイガイ イネツトムシ	バダン粒剤4	3~4kg	収穫30日前まで	6回以内	① 3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。	
いもち病 初発時	いもち病	コラップアップ	250g	出穂5日前まで	2回以内	① コラップアップは、3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後1週間は落水やかけ流しをしない。		
		ブラシリアフロアブル	1000倍	収穫7日前まで				

※ 稲こじ病の液剤処理はブラシリアフロアブル1000倍にて行う。

※ 農薬・除草剤は2023年10月1日現在の登録状況による 2023年10月作成